

～だから～

どの布が一番きれいに染まるかな

岡崎市井田保育園（愛知県岡崎市）

[5歳]

<事前の様子>

クチナシの実を初めて見た子どもたちは興味津々で「固いよ」「線がある?」「ポッコってなっている」「花の匂いがする」「唐辛子みたい」「くっさーい」などと言っていた。また、花卉の多い保育園のクチナシは実が生らないと知り「だから、保育園のクチナシは実が生らないんだ」と言った。さらに、クチナシの資料から「色が付く」ことを知り、染まった布を見た。そして、「どうしたら染まるのか?」話し合った。



事例 いろいろな布

クチナシの実をどのようにすると色が付くのかを考え、「実を潰す」「実をすりおろす」「中が黄色いのかなあ?」「でも、実の色は、オレンジと赤だよ」「違うよ。黄色の絵の具を使うんだよ」と話していると、「布ってわからん。何?」と、布についても疑問が出てきた。そして、「布って、この服のことじゃん」と子どもたちは、それぞれ自分の服を触り、感触を確かめて、「毛糸でできている」「針みたいにチクチクしている」「絵が描いてある」「サラサラする」「モコモコする」「ギザギザになっているよ」「伸びる感じ」「フワフワしてる」と言った。さらに保育者が「色を染めるとしたら、どんな布がいいかな?」と言うと、子どもたちから「青い布は…?」「黄色い布の方がいいよ」「黄色だとクチナシの色と一緒にじゃあ」「サラサラの布は?」「ペラペラの布の方がいいよ」「超ザラザラなのは?」「フワフワの方がいいかなあ」「固い方がやり易いよ」「普通の布がいいと思うよ」など自分達の服を触り感触を確かめて、真剣に考えている。

事例 どの布がいいかな?

染める液のことを話し合い、自分が染めたい布を選び、布を液に浸してみた。すると、「ワッフルの布の液が少なくなった」「デニムの布の色が黄色でなくて緑の色に変わっちゃった」「黄色いタフタは、色が濃くなった気がする」「食パンマンの白色のところだけ、黄色になっちゃったよ」と、それぞれの思いを自分なりの言葉で話す。

保育者 「どうして、ワッフルの布の液は少なかったのかな?」

A児 「それは、布にジューツて染み込んだからだよ」

保育者 「でも、他の布もジューツて染み込んだでしょう?」

B児 「そうだけど…。あっわかった!布は液がジューツと染み込む物と、あんまり染み込まない物があるんじゃない。だから、いっぱい染み込んだ布と、そうでない布に分かれるんだよ」

C児 「そうだよ。きっと」「だもんで、いっぱい染み込んだんだよ」

D児 「そしたらさあ、水をたくさん吸い込むワッフルの布だとプールに入ったら大変だよ。水いっぱい吸ったら重くて溺れちゃうよ」「大変だ」

E児 「ねえ、この液の色が変わった」

保育者 「なぜ、色が変わってしまったのかな?」

F児 「この布から色が出たんじゃない。そいでさあ、黄色と混ぜて緑になったんだよ」

C児 「そうそう、絵の具で黄色と青で混ぜたことある。そしたら、緑になったよ。だってこの布(デニム生地)青じゃん。青と黄色混ぜたら緑じゃん。絶対そうだ!」

保育者 「線が消えたり黒色が薄くなったり、ピンクの布が赤くなったり黄色の布が濃くなったりしたのは?」

G児 「色が黄色と混ぜたからだよ」

保育者 「そうかあ、でも、混ぜたのにあんまり色の変わらない布もあるけど、どうしてだろうね」

A児 「分かった。布の色が濃いからあんまり変わらなかったんじゃない。黒や赤は黄色に勝って、黄色が勝つと布の色が黄色になるんだよ」



このようにやりとりをして、保育者が「染める布はどの布を使ったらいいかしら?」と言うと、子どもたちは「白い布!」「だって、黄色は同じだから面白くない」「赤や黒は黄色に勝っちゃうからだめだよ」「絵が付いた布も、白い所にしかきれいに色が付かないからだめでしょう」「だから、白がいいよ。だって白の方が、色が染み込みやすいし、黄色がよく分かるよ」などと口々に言い、白い布で染めることになった。

ポイント

園のクチナシの木は実が生らないため、「クチナシの実」に関心をもった子どもたちは「染めることができる」と知ると、実行する話し合いをしています。幼児なりに予想をして進めているので、染めている時の、液の量の変化や染み込んでいく様子をよく観察しています。また、子どもたちは布の色と染まった色との関係についても考え合うやりとりをしています。

<科学する心が見える — 関係に気付く> 「～だから～」

ここから見える

子どもたちは目の前の布が染まっていく様子から、「水が減った」「色が変わった」という気付きをしているだけではなく、「水が減っているのは～だから」「色が変わるのは～だから」と、関係にも気付いて思いを巡らしています。

- ④ E 児 「ねえ、この液の色が変わった」
保育者 「なぜ、色が変わってしまったのかな？」
- ⑤ F 児 「この布から色が出たんじゃない。そいでさあ、黄色と混ざって緑になったんだよ」
- ⑥ C 児 「そうそう、絵の具で黄色と青で混ぜたことある。そしたら、緑になったよ。だってこの布青じゃん。青と黄色混ぜたら緑じゃん。絶対そうだ！」



- ・ 布が染まったことだけでなく、染める液の色にも着目し、変化に気付いている。④
- ・ 液の色が変わったことに不思議さや驚きを感じているので、気付いたことを言葉にして伝えている。④
- ・ 「布から色が出た」「布から出た(青)色と黄色が混ざった」「青と黄色が混ざり緑色になった」という順序性も意識して、液の色が変わったことと布の色との因果関係を考えている。⑤
- ・ 考えたことを順に言葉にして伝えている。⑤
- ・ 自分の考えを伝えて、友達の考えや意見を求めている。⑤
- ・ 友達の言葉を受けて、自分も以前の体験で絵の具を混色した時のことを具体的に思い出している。⑥
- ・ 思い出したことと、友達の話が一致することを確認する。⑥
- ・ 具体的に言葉にすることで、考えたことが納得できる。⑥
- ・ 保育者の「なぜ？」の問いに答える考えであると確信している。⑥

こうして、染めた液の色が変わったことには理由があるという因果関係に気付き、色や色水に関する知識を得たり興味を深めたりして、「科学する心」が育まれる体験をしています。

そして、「だから、白がいいよ。だって白の方が、色が染み込みやすいし、黄色がよくわかるよ」という、本来の取り組みの目的に沿った考え（結論）が引き出されています。

この事例では、染色の方法やきれいな染め方を示す環境や支援ではなく、子どもたちの気付きや疑問、探求心を引き出す展開により、子どもたちは「科学する心」が育まれる体験を深めました。

視点を
変えて

この事例の5歳児は、経験を生かして疑問を解消し、気付きを手掛かりにして目的に沿った考えを共有しています。では3歳児や4歳児では、どのようになったのでしょうか。

子どもたちは様々な感覚・感性を働かせて意欲的に遊ぶことで、年齢や実態に応じた考えをもち、夢になって遊びます。遊びを進める中で、疑問や課題を解消することを目的にするだけでなく、子どもたちの疑問が増えたり膨らんだりすることや、ものの本質に迫るような気付きや考え方をしようとする姿勢が重要です。そして、遊びを通して子どもたちの体験する内容が向上していきます。